電子複写不可

複製史料
昭和　年　月　日

神日誌　其二

沖台
沖縄
254-2

昭 12.23
893

760C2
1-1
893

第三十二軍参謀
陸軍中佐　神直道

防衛研修所戦史室

敬訓
仙台外記浮
中平洋治君
渡了様
十七日宅へ
送付アリシ

仙台市
東三番丁二五三
神直[illegible]

22

¥ 13,000,000.00 ¥ 20,000,000.00

1

大阪

東洋棉花株式會社

TOYO MENKA KABUSHIKI KAISHA

營業目的

[illegible]

[illegible]

一月四日（火）

◎十二月十七日
[illegible]

◎[illegible]
[illegible]

◎[illegible]
[illegible]

◎[illegible]
[illegible]

五日（水）

◎[illegible]
[illegible]

◎[illegible]
[illegible]

◎二十七日
[illegible]

一月八日(土)

[illegible]

一、[illegible]作戦の要は国土外に[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二、[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一月九日(日)

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一月十日(月)

1. 大学ノート [illegible]

[illegible]

2. [illegible]

[illegible]

3. [illegible]

[illegible]

一月十一日(火)

[illegible]

二、[illegible]

[illegible]

一月十二日（水）

[illegible]

———×———×———×———

[illegible]

———・———

[illegible]

◎[illegible]

[illegible]

一月十三日（木）

[illegible]

◎三十日

九時[illegible]

[illegible]

昭和二十年

◎一月一日

[illegible]

◎二日

[illegible]

一月十六日（日）

[illegible]

一月十七日（月）

[illegible]

① 1.5. 敵未ダシテモ依然台湾
東方海上ニ在ルモノ、如シ
在支米空軍ト呼応シ依然爆
撃を実施しあるが如し
台湾防空益々重要となれり。

② 1.6. 敵ハ愈々本格的比島攻略
に動き出せり。
本日午後リンガエン湾
上陸、按ずるに船団
護衛、機動部隊を伴ひ
且つ日本よりの鉄道的補給
並に山下将軍の勇敢なる将軍
の指揮する我軍と敵の
決戦の秋なり。

再び反省す 我は何をもって勝たんと
するか

1、欧州大陸ハ独ソ英 何れの勝敗
に拘らず 大動乱の兆候に
於て戦争は継続すべし
・各国の人的資源 殆ど枯渇
（独 1100万
ソ 1300万）の状況に鑑
みるに 拾収すべからざる大
なる混乱となるべし。

2、東亜戦局
イ、支那。蒋政権の死後指導者
政権ハ名実共に その存在
の意義を失ひたり
日支の状況は依然現状
互続すべし 但し
従来の 蒋政権打開の

一月二十日(木)

陸海軍には之を伝ふべからず

ロ、加、濠は既に屈服的

傾向を示しあり、取るに足らず

ハ、米

国民の生活的犠牲

人命損耗より漸次厭戦的

に至りつつあるは疑ふべくもあらず

大 米統帥部は国内情勢と

日本作戦能力判断に基き

有効的短期決戦を指導

し来り

以上の情勢と我の計算を

根拠とし考ふれば速に

(ロ)中 戦争指導要綱乃至

一月廿一日(金)

作戦指導の眼目は次の如し

① 日満支戦中に入り動

かず、動かんとも動かれぬ

関係する優位を把握し

て戦ひ得ること

② 作戦上、

殲滅戦法に徹す

なほ 持久
戦略 } に徹す

開戦後

第一段作戦の使命は

大勝利と戦果の拡大革大化

の更に輪をかけたる戦積

187

一月廿三日（土）

吾等戦は日本国民を
目覚し 総帥者又決断し
方針大となり、軍隊は敵を
追ひまくるに至る かくして敵の
真の[illegible]たりに[illegible]一[illegible]
もまし、

今[illegible]に至るべきは
日本国力の真の認識と
[illegible]する戦争苦しみならぬ
手を取られ足をもがれつも
敵と[illegible]
[illegible]

[illegible]

○ 1.9.

正月気分に親み 比島戦況
午後の作戦準備要領指示の為
部隊長会同を行ふ 集る面々
の顔を見る 意気軒昂たるもの
燃ゆるもの 眼のかがやけるもの
燃ゆるもの。皆々この人々を
引連れて戦はんとす。戦争
の運否が成否を決せん。
此の日再び機動部隊とB-29
の空襲あり
~~艦載機延 450~~ 撃墜 15
別に B-29 若干 （不4）
撃破 8
関東・東海道方面にも B-29 30
60機／分散攻撃あり。

一月廿二日（土）

比島戦は正に大本営発表を
見ても惨烈なる戦闘を
奮闘大となり。軍隊は敵を
あなどるにもよる かくして敵の
真の強さを知りて今更や一層なり
きまし。
今回戦ひに自覚すべきは
日本国力の真の認識と
多少る戦争の苦しみ知らぬ
手段をもがけつつも
敵の物量作戦に勝ちぬかん
とする気概の昂揚なり。
[illegible]
[illegible]

○ 1.9.
石井氏空襲に鑑み 防衛教育
午後の作戦準備要領指示の為
部隊長会同を行ひ来る面と
の顔を見る。意気軒昂なるもの
憂ひ無るもの 眼の輝けるもの
思ひ沈めるもの。皆この人々を
引き連れて戦はんとす。教導
の適否が成否を決せん。
此の日再び機動部隊とB-29
の空襲あり。
艦載機延450 ｝撃墜15
別にB29若干 ｜（不4）
撃破8
関東東海道方面にもB-29 30
60機／多数攻撃あり。

189

一月廿四日（月）

比島方面に赴ける補給機の流動せざることを憂慮し機動促進の為22.30の便に依て鹿屋に向ふ

◎ 1.10

1000鹿屋着 直ちに地区司令部に赴き機動状況を聴取す。

○ 機動統制に任ずる者 其の業務完遂の為晩(?)寝ずし 勤務の方法を熟知せず

○ 空中勤務者閑散少し

○ 移動する兵器の事業を確認す

予は異見(?)なくんば 斯くして機動を推進せん

敵リンガエンに上陸せる旨報ず

一月廿五日（火）

◎ 1.11

六時起床 飛行場に赴き

比島向け空輸機 機動促進に従事す。八時半迄に大部（戦斗機28、司偵5ヶ、攻撃機5ヶ）を了し一安心せり。0750より新たに陸攻戦闘機待機の状況を見、空襲の好機なるべきを思ひ憂慮せり。

比の日敵リンガエン上陸の報で紙上に知れり。

昨今比島に入れたる戦斗機を補給戦空軍が入つより甚いある観を帰還空中勤務者に聞き心ゆく愉快に思ひたり。

午後帰京せり

航空補給部に於ける機を回収、双発機は嘉義に於て東方軍（台湾航空軍）に支作(?)関係の輸送は陸戦隊に於て実施すべき電報に接す（0930）

170

一月廿六日（水）

要するに自然な推算に過ぎず
即ち5週間に亘って実施せられんか
比島の主要なる作戦線に
航空部隊の強力なる攻撃を行い
部隊の移動を阻止する作戦
再び航空部隊の兵力集中
を要するに至る。
依って次の事項を参謀長
台、東、兵站参謀長に打電
す。1. 以上の理由に基き東国
より飛行機、操縦者を
差遣し作戦の如く
[illegible]
2. 輸送用、船舶、燃料
を乙に還元せず継続
の如くにせられたきこと
3. 主要の職務は
（航空中央部）危機不安
[illegible] 搭乗員生産不足
[illegible] 本格的体力の
不足

一月廿七日（木）

真に比島を確保して敵を撃滅せんと
せば 8飛師を4航軍の隷下
に入るべきなり。8飛師は4航軍
の後方、台湾を受け持ち且本島
の作戦準備を行うべき権限を
有すればなり。

1.12. 掃蕩 B-24 2回に亘る空襲
をうけたり。本島に於てB-24の攻撃を
うけたると思う。何となしに第一線
的感を深うす。又之も毎日トラック
にて この攻撃をうけつつあるならん

屏東飛行基地を攻撃して比島
への航空補給遮断を狙うものなる
べく 恐らくは自今毎日続く
ものと判断せらる

我が方は殆んど我が機の
損害はないが 戦果を見ず。
素直に至り陣地の構築

「航空作戦を指導す。比較的整在たる事務施行なりなり」

○1.13
台中に到りて第十九戦隊の状況報告に依ず
総軍猿生参謀台北にあり報に接し急遽帰北し、千機の実施補給方法に関し協議す。
第四航空軍との連絡無く之せらる
10FR 出田大尉機をエチアゲに進入偵察し連絡するに決す
総軍が4航軍の実勢力に対する過大評価には呆れて物も言えず
曰く450～460機、実動160 十二月末日なりと、十二月中旬に於ける予の記録によれば30キ以外
総軍が西貢に到りてより七ヶ月
陳旧に富めなりしか。

如何に戦況に遊離せしか明らかなり。

○1.14.
四航軍特石参謀、三十年田構及台湾屏東来着を迎へ一家協す
出田機の出動を止む

○1.15.
四航軍松前参謀台北に来る。
はじめて比島航空作戦の実情を知るを得たり。
八飛師との作戦協定
対比作戦為全～協力援助
対機動部隊
対基地航空 } 協力関係
に依り実施することに協定す。
比島に於ける航空作戦の敗因は地上部隊が航空部隊を無視せるに依る。
即ち十四方面軍が自戦自活

192

一月三日十(日)

り持久戦は計画になし航空の海上の決戦―上陸阻止の決戦を企図せるに依る。即ち航空の基盤を一線陣地前方に推置せることに依り、23ー2航空基地群を放棄せざるを得ざる状況に立ち至り、実質的に航空の生命を喪失せり。

又せりとの[illegible]方策になし大本営第一部長が直流する指導を為さず、単に山下将軍に作戦を委任せりとの学問的観念統帥を以て[illegible]終始せるに依り何れも無気力にして共に救ひ難し

一月卅一日(月)

○1.17.
四航軍富永中将台湾に来る。
何の故か少しも分らず。
畢竟するに
自己の作戦地をほったらかし任務を放擲し単独に隣接軍に飛び込みしこと罪萬死に値す。

138

二月一日（火）

01.26.

台湾航空作戦を如何に指導せんとするか

臣民強盛可

特攻対策を強烈迅速に実施

而して来島（比島軍）に対し

寧ろの方法を以てしては不可

要は出血、敵の弱点を衝むる

毎に右の端より叩き上げるに

若かず。機動部隊を潰滅せしむるを上策とす。

徹底的一挙撃滅主義

は一挙に撃滅せしむるのみ。

二月二日（水）

01.25.

14HA部校長講話を拝聴

自信のある陣地に拠り敵をして

如何に出血せしむるかの考へは

遂にタラータを捨てざるべからざる

方策を実現するに到りたる経緯を

明らかならしむ。

捷号作

特攻効果　5キにて一隻

将来台湾に来攻する場合

敵は恐らく特攻対策を用ゐべく

10キにて一隻か？

194

二月三日(木)

○富士の霊峰も近くに見れば何とかなる。

司令部も年末にて聞きたる程のことはなし。

山本中将は武信より。

参謀は劣つす。

作戦主任は思ひ上りあり。

参謀にて取るべき者は川野参謀ただ一人。

各部は作戦に動かず。

骨のあるのは高級副官なり。

台湾軍もよくよく見れば村田少佐唯一人。

二月四日(金)

175

二月五日（土）

○ 2.6

第四航空軍の統率上の不手際
もさることながら自ら顧みて
果してよきや。
第四航空軍の終末のみを批
判し、思ひ上つた態度、
即ち弱者から強者の態度を
採るに至つては実に哀れと
云ふもおろかなり
人の言に耳を藉さず自画自
讃の作戦指導を実施せば
すべからく勝を後に譲ん
でも取り返し得ざるべし
予はこれに対して主任業務
の立場より独走をうかつ
すのみ、時に非協力、挑戦的
態度をとることありとするも

二月六日（日）

勝つためには手段を
えらばず
サボタージュもまたせんなし

―――○―――

服部第二課長転出して
在支天野少将作戦課長
就任との風評をきく。
真なりせば、はたして現作戦
部長は服部大佐を使ひ得
たりしか、服部大佐はおそらく
胆において、気において、才において
人において当代の第一人者
なり。惜しんぬるかな。

178

貳月七日(月)

○ 2.11
第二課高木少佐来部
何時も乍ら元気にて何より。

自分一人にて戦争なんどいうぬぼれたら大変。
我航空師団は与へられたる兵力と現存兵器資材を以て最善の戦斗、決死敢斗の戦ひをなすが最大の責務なり。
上に頼らず、上を批判せず

○ 2.13.
高木少佐と共に[illegible]出張
[illegible]航空軍[illegible]を
[illegible]、以て[illegible]すべし

貳月八日(火)

情の統率を行ひし司令官には情を以て報ゆべし

義の統率と云ひ、情の統率と云ふ、何を以て分るか
何れも 大君の御委任を受け、大君の軍隊を預り、大君の為に戦ふ
飽く迄も大義を基調とせること同じ。
俗に云ふ義の統率とは即ち冷徹なるを云ひ
情の統率とは ~~母~~ 情に依るを云ふか。
大君の為に帰一する

二月九日(水)

統率は情義一如なり。

第三十期予備学生と進出戦中に関する打合せは之を行ひたり。

○月末

○機種毎に指揮系統を極力減少

○指揮所 集束。

2.14.

二月十日(木)

「軍神杉本中佐」を読了す。今まで一読もせざりし我を恥ず。

大義に身命を捧じ大義に殉ずること これ真個日本人たる所以を沁み沁みと身に感じ我れ自ら明るくするを覚ゆ。

2.14. 敵大船団昨十四日サイパン附近330°北進の報あり。夜に至り八丈島南方200浬に

3.24.

モルトケは戦術思想を統一するため陸軍大学をひらき普仏戦、第一次大戦に偉功を奏したり
我が陸大においては所謂俊秀を集め過ぎしため、戦術思想を統一するところが勝手な熱をふき上級司令部大本営を批判するに頂みする弊習を養成せり。

○ 2.17.
宅処第三十二軍参謀に補せらる。何故かは知らず 知る人ぞ知る。
此の日 井田参謀と共に 母校に語る。

○. 3.1.
艦載機南西諸島を 洗ふ、其隙を利用 して、小禄飛行場に 滑り込み赴任す。
軍司令官ハ牛島満中将
参謀長ハ長勇 中将

3.2.

由紀子の百ヶ日より、何も供養し得ざる我心を恥ぢ、由紀子に捧げて思ふ。

首里山城町某男爵邸の一室を借りて我が居となす。

机上由紀子の遺影を安置す。

3.3.

由紀子の生きてあらば桃の節句とて雛祭をかざり、桃を生けて祝いしを、

本じつ首里秘密飛行場を放棄す。

3.4. 北、中飛行場及飛行場部隊放棄す。

———、———

山紫水明の地、戦すべきの所。

———、———

3.5.

○ 七号部隊支援兵力配置に関する意見具申（10HA）

○ 気象部隊能力向上（8FD、陸軍）

二月十七日(木)

に関する意見 (8FD)

○. 6FA / 5AF } 兼任意見具申

○ 5野航 1個教下級幹部増加に関して連絡 (10HA.8FD)

3.7. 伊江島航空作戦準備状況視察

離島信頼心 …… 正しく流し

自ら墓穴生活を送り

凡ゆる工夫努力を

(攻撃 [illegible])

二月十八日(金)

おじあるを見て真に懐ましく覚えたり.

3.8.

大本営も戦勢は逆に非. 割当. 判断権の問題あり.

本島方面航空作戦指導の為 派遣兵力に関する意見具申は巧みに一蹴せらる.

自らの作戦地域であり乍ら 自らの兵力を以てせず. 他部隊に依存せんとする意図

二月十九日（土）

不可解なり。又台湾
又は先島諸島附近より
敵方面に進攻協力せん
とするも目下の航空部
隊の素質をもってしては
到底望[illegible]する事なし。
残機に於いたる
作戦は不能にして
航空作戦の困難性
を知らざるも甚だしき
やと嘆ぜざるを得ず。

二月二十日（日）

3.10
六航軍天号作戦状況見学
のため軍偵を駆って
福岡に到る。

3.11. 六航軍青木先任参謀
と共に鹿屋五航艦司令部
に到り連絡。
方にウルシーに攻撃せんと
する時に会す。
21機中12機命中が
5AFの意気旺なり。

203

われこそは
大和男子で
君が為
火をも水をも
さけじと思ふ

二月廿三日(水)

考ふる思ひ
大きな木なる
吾が
大嵐の風もて吹
生ひ出し

二月廿四日(木)

3.12. 華尾より秘書に帰還す.

3.13. 午後通信情報研究会

現在の通信情報を見.
通信部隊の素質練な
及近き将来に向上すべき
通信度を考慮するは
遠隔手から通信に依頼
せんとする傾向ある如き
作戦は不能ならし
よろしく「通信」する情節
を省略するの作戦構想
と戦法を創案するの
要大なりと痛感せし
なると共に

幕僚の通信に関する
能力不十分なるを痛感す

3.15、[illegible]兵団実兵指揮演習
を見て所見あり
1. 戦車を有する特攻隊を
主体とする戦法創意
しあらず
2. 海軍の戦法、能率の
訓練を全殺す
3. 機動部隊に対する
[illegible]の
認識不十分にして

甘し
4. 各部隊長の意見又は
提案に対する幕僚の
適確なる返答なく
自信なきが如し
5. 兵団長以下の自信
全然なし又部隊長
に対する威力、指導力
なし

以上の状況を以て何すれぞ
皇土周辺に於ける洋上
作戦の行はるべき
暗澹たる気持となれり

206

夜大越卿を訪ぬ、
久方ぶりの面接にて
心なつかしく覚ゆ
昔を憶し 談論風発
夜半に至る 床に出か
らる 吉田松陰の
墨子の大文字を、

東大雄、
君がお朝霜ふみて
行く道は貴く
嬉しく悲しくありけり
松陰
御国の大事に候

二月廿九日(火)

三月一日(水)

防総木川参謀に会いて久闊を叙す。

所見要項

1. 特部隊就せしむるに之れしっかり核心を与える如く指導のこと。

2. 機動部隊攻撃に関する方法に就いて。

3. 司偵の統一運用に就いて。

4. 練度良好なる部隊は益々特攻を命ぜざる

三月二日(木)

べからざる所以に就いて

5. 皇都に対し 機動部隊を以て攻撃し来る場合の戦法に就いて、

三月三日(金)

3.17、
本日も欠航なり。稍退屈。夜 徒れ徒れの儘 映画見物に出かけ「陸軍特別攻撃隊」を拝見したり、吾が知己 敬之介の死の直前笑顔とに微笑みつつ往くを見 皇国の盤石を覚ゆると共に眼頭自ら熱くなりしを知る。

三月四日(土)

討たでおくべきか！
アッツの恨みを
ガダル以来の恨みを
サイパンの、レイテの
南に皇軍の魂を、
咽喉に喰らいついて
も必ず勝つ。

三月五日(日)

210

211

三月六日(月)

[illegible]

三月七日(火)

[illegible]

[illegible]

[illegible]

212